



アーツ前橋 2019年度
アーティスト・イン・スクール
活動報告書



Artist in School



Photo. 木暮伸也

住中浩史

前橋市立

第六中学校

尾花藍子

前橋市立

勝山小学校

中島佑太

前橋市立

桃川小学校

アーティストやクリエイターが市内の小・中・高等学校へ出張し、児童・生徒・先生たちとかわりながらワークショップや授業を行う学校連携事業です。地域や文化の未来を担う児童・生徒たちとアーティストが共同で学び、自分の可能性を考え、発信する表現力や他者とのコミュニケーション力を身につけます。実施にあたっては、アーティスト、時期、内容等について学校の先生たちと一緒にプログラムを組み立てます。実施4年目となる2019年度は、長期プログラムと1日完結プログラムを計3校で行いました。

6Tube ロクチューブ

～私の主張を動画で発信～



無編集の映像作品をグループ制作するプログラム。アーティストと美術教員、学芸員、コーディネーターが協働で授業開発と実践を行いました。現代の中学生はYouTubeをはじめとした映像コンテンツに親しんでいます。しかし、美術科教育における映像メディア学習の実践は非常に少ないのが現状です。今回の授業では、自分の考えを映像として表現する力、試行錯誤を繰り返しながら作り上げる力、映像から作り手の意図を読み取る力を育むことを目指しました。

※第59回関東甲信越静地区造形教育研究大会群馬大会にて「表現分野」の公開授業としても開催



授業は住中さんと鈴木先生の2人で進めました。校内で各グループが撮影する際も、それぞれ巡回して生徒の様子を見ながら相談にのりました。

プログラム概要

期間	2019年8月29日～2020年1月21日
場所	前橋市立第六中学校 美術室など
対象	前橋市立第六中学校 3年生4クラス

アーティスト

ひろ なか ひろ し
住中浩史

前橋市立
第六中学校



全体スケジュール

日程	内容
1-8月(12回程度)	美術部への参加、授業事前打ち合わせ
8月29日-1月21日(全48コマ)	6Tube授業実践
3月13日	卒業式に合わせ、作品集DVDを生徒へ贈る

学習計画/授業各回の内容(全12コマ×4クラス)

回	概要	備考
1	住中さん自己紹介 自己紹介動画撮影	2人1組で1人1つ。ワンカット20秒程度
2	作品鑑賞	現代美術家の映像作品を鑑賞
3	映像のコンセプトを 班で考える	テーマ：中学校生活で密かに思っていたこと
4	アイデア出し	住中さんによるレクチャーとカードゲーム
5	映像の内容を考え 役割分担	条件：ワンカット30秒以上、無編集の映像作品
6-7	撮影I	中学校敷地内で撮影
8	中間発表・検討会	隣の班の映像を相互鑑賞し、意見交換
9-10	撮影II	住中さんからヒントになりそうな既存の映像作品も紹介し、解説
11	鑑賞会I	完成作品上映と説明、生徒同士で感想発表
12	鑑賞会II	未完成作品も上映しアーティスト・学芸員・教員によりコメントと意見交換。映像リテラシーとクリエイションの文脈について住中さんよりレクチャー

(アーティストプロフィール) ----- 住中浩史

地域『で』アートを行うのではなく、その地域『の』アートとはなにかを絶えず模索しながら、実際に制作・行為・会話の中で実践するアーティスト。近年は、新しいドラマが生まれる「場づくり」と、今起きているドラマが加速する「アイテム」づくりを行う。2016～2019年DASHIJINプロジェクト(ポータルミュージアムはっち)など。



学校のタブレット端末で自己紹介を撮影。カメラに映る恥ずかしさ、20秒という長さやどのように撮るかといった戸惑いが後半の制作に活きていきました。



1回見ただけでは何だかよくわからない現代美術の映像作品も、繰り返し見て意見交換をしながら自分が感じたことや考えたことを言葉にしました。



「中学校生活で密かに思っていたこと」をグループで出し合い、それをどのような作品にするか住中さん発案のカードを使いながら検討。



あとで編集しないので、撮った映像を確認してその場ですぐに改善点を把握し、撮影。試行錯誤の循環が生まれます。役者も何度も体張りました…。



一度撮影した映像を隣のグループと鑑賞し合い、いい点、わからなかった点、アイデアを提案。もらった意見を次の撮影に活かすため真剣!



最後の作品上映会は大盛り上がり。生徒同士の感想にも、アーティスト、教員、学芸員らが、完成作品とNG作品集を元にコメントしました。

活動のポイント

授業への満足度が、生徒の自信につながる
撮影は誰でも簡単にできるので、絵を描いたりするのが得意でなかった生徒も意欲的に取り組むことができます。授業後のアンケートによれば、生徒たちは自分たちの力で挑戦・改善して映像を作り上げたことに手ごたえを感じていました。また上映会を通じて、自分たちの作った映像がクラスメイトを笑わせたり喜ばせたりできたことにも満足を感じ、制作と発表に対する自信をつけることに繋がりました。

生徒とアーティスト、教員が学び合う

生徒たちが日頃慣れ親しんでいる「映像」という題材を選択することで、授業に取り組む態度も積極的になり、題材に対する新しい発見を促します。また、生徒の意欲的な表現からは、中学生の映像言語が豊富であることや、いまの社会が子どもたちにどのような影響を与えているのかを知ることができました。(教える側)であるアーティストや教員も(教わる側)の能力や経験値を理解し、次回授業の内容を検討・工夫するという循環も生まれました。



子どもの声 <3年生>

映像づくりは初めてで不安でしたが、班のみんなと試行錯誤していくうちに楽しくなりました。「どうすれば映像のコンセプトが鑑賞者に伝わるか」「シナリオをどう展開させれば面白くなるか」など話し合いながら、演技やカメラワークを決めていきました。アイデアを出し合って一つのものを作り上げるのはとても楽しかったです。

先生の声 <美術教諭 鈴木紗代先生>

外部の方と関わることが生徒たちにも良い刺激となり、それが彼らにとっての「リアルな表現」を引き出すことができたと感じました。生徒たち自身の学びも主体的になり、満足感も非常に高かったです。また映像専門家の外部アーティストやコーディネーターの多様な視点は、教員としても良い刺激となりました。必然的に中学校美術科教育ができていないことへ挑戦もでき、自分の美術教育に関する考えを更新する機会となり、改めて生徒たちがつくる「リアルな美術」の楽しさと必要性を確信することができました。

----- (アーティストからのコメント) -----

今回のポイントは「アイデアをのっける」ことと「無編集動画」でした。グループ創作は、多数決を止めアイデアを次々とのっけていくことでより多様な変化が生まれます。また、無編集動画は撮ってその場で確認ができ、アイデアをのせてすぐ撮り直せます。今回、毎回の撮影の度に作品が良くなっていったのは、これらのポイントによって生徒たち自身で創作を深めていけたからだと思います。

言葉を越えた コミュニケーションの 可能性を探る



言葉を使わずに相手とコミュニケーションをとるワークショップを実施。児童、先生、スタッフ全員が参加者となり、二人一組になり、身振り手振りやアイコンタクト、動作などが徐々にルールで制限されていく中で、子どもたちは探りながらコミュニケーションの方法を編み出しました。同時に、コミュニケーションが「取れない」感覚を味わったり、日頃意識しにくい周囲の環境や生活の音、人の気配などに耳をすませ、全身で感じ相手に表現するということを体験。尾花藍子さんがダンスの振付や演出をするときに大切にしている手法を、ワークショップというかたちで実際に体感してもらいました。



プログラム概要

期間	2020年1月21日 8:50-10:25 (1組) / 10:45-12:20 (2組)
場所	前橋市立勝山小学校 多目的ルーム
対象	前橋市立勝山小学校 5年生2クラス、先生方、スタッフ ※見学者を作らず全員が参加

アーティスト

お ぼ な あ い こ
尾花藍子
前橋市立
勝山小学校



当日までの全体スケジュール

日程	内容
11月1日	校長先生、担任の先生、コーディネーター顔合わせ、企画概要の説明。
12月4日	校長先生、担任の先生、アーティスト顔合わせ、詳細打ち合わせ。「帰りの会」の時間に児童へ挨拶、会場下見。

当日のタイムスケジュール (1組の場合)

時間	内容
8:50	あいさつ、スタッフ紹介
8:55	ウォーミングアップ。室内の好きな位置に寝そべり、自分が一番ゆっくりだと思う速度で起き上がる。目を閉じた状態でゆっくり歩いてみる。
9:10	2列に並び向かい合った人同士でペアをつくる。一人は目をつぶり、もう一人はその人に近づいたり離れたりしながら気配を渡してみる体験を交代で行う。
9:25	ルールをひとつずつ増やしていきながら、言語以外でコミュニケーションをとってみる。新しいルールを試し終わるたびに感想をペア同士、グループ、またはクラス全員で共有する。(ルールの内容:目を合わせない、ジェスチャーをしない、音を出さない、相手に触れない等)
10:10	クラス全員で今日の感想を共有。最後に尾花さん、校長先生、スタッフからのお話。
10:25	終了

※2組もほぼ同じタイムスケジュール。
時間配分やルールの内容、順番は児童の反応や状況に応じて若干変更しながら行った。

(アーティストプロフィール) ----- 尾花藍子

東京都出身。美術・プロジェクト作品発表と並行して、近年は主に振付家・演出家として活動。ダンスカンパニー〈ときかたち〉主宰。舞台作品では「距離」を振り付けることで、人間の身体と心の繊細な動きや気配を表出させ、「あわい(間)の身体」を立ち上げる。2018年にダンスカンパニー〈ときかたち〉としてアーツ前橋の滞在制作事業に参加。前橋にて観客参加型の作品制作と発表を行った。



目をつぶって歩いてみる。ゆっくり歩くと、みんなの気配を感じとりやすくなります。



自分が一番遅いと思う速さで起き上がる。身体を感じる瞬間。



一人は目をつぶり、もう一人は近づく。横を通るときどんな感じだろう。



ペアになって無言で伝えあってみる。



やってみたあとグループで感想を共有したり、思いつたコミュニケーション方法をお互いに紹介。



尾花さんは様子を見守ります。

活動のポイント

言葉を使わないコミュニケーションの体験

コミュニケーション能力が問われている現在、様々なコミュニケーションの方法を子どもたちが自ら編み出すことで、人と人が実際に向き合う面白さを体験。また、異なる者同士が共存することについて考える機会となります。

日頃気づきにくいものへの意識

日常生活で普段気づきにくい部分への意識を研ぎ澄ませ、身近なもの・ことの中に新たな発見や気づきをもたらします。

身体表現の可能性

アーティストの活動に直接触れることで、図画工作・美術に対するイメージや可能性を膨らませることができ、子どもたちの未来の興味を広げます。

子どもたちの声 <全て5年生>

- 普段しゃべってるから新鮮に感じました。
- いつも使っている言葉が使えなくなって不安な感じになった。難しかった。
- 目をつぶるとコミュニケーションがあまりとれないけどやってみたら案外伝わったりしたので身近でもできるように頑張ってみたい。
- 目をつぶると誰かが横にいたり近くにいたりすることは絶対に気づかないと思った。
- 人が自分の近くを通ったとき、あつたかく感じたり冷たく感じた。

先生の声 <校長 吉野忠義先生>

今回、アーティストの尾花藍子さんをお招きし、5年生を対象に様々な方法でのコミュニケーションを体験させていただきました。描く、つくるといった一般的な図画工作の学習ではなく、言葉やジェスチャーなどを使わずにコミュニケーションを図る等、子どもたちにとって初めての経験であり、戸惑いもありましたが、とても新鮮な体験となりました。体験から、表現すること、人の気持ちを感じ取ることの大切さ、難しさを感じている子どもたちも沢山いました。今回の学習では、図画工作や美術において作品を作り上げることは、表現をし自分の思いを伝えること、鑑賞は、人の思いを感じ取ることであるという、図画工作や美術の本質を学ばせてもらうことができました。

----- (アーティストからのコメント) -----

自分と相手とのあいだに「言葉にならない感覚」を感じたとき、どんな身体と心の反応がありましたか?そして、どんなことを伝えたいくなりましたか?「わからないことだらけだ」ということに立ち戻って、それでも、「わかって!」としてみることは、はじめての手触りと出会って、いっしょに心躍る世界をつくる大きな一歩がかもしれません。

他者の考えに 耳を傾けることから 始まる表現



2017年度、2018年度は主に図工授業の教員の補助を行い、図工に苦手意識を持つ児童たちにも表現することの楽しさをアーティスト独自の視点から伝えてきました。2019年度はこれまで通りの図工授業の補助のみならず、アーツ前橋の収蔵作品である近藤嘉男の《足尾風景》(1950年)から中島自身の現代アート作品までを児童とともに鑑賞しながら、社会の問題や課題に対して美術がアプローチできるということを児童に感じてもらえるような授業を組み立てました。作家の近藤嘉男が足尾銅山へ自ら出向き調査を行い作品を描いたように、児童たちには自分の目の前にいる相手の話をよく聴き、聴いた話から作品を制作することの意味を一緒に考えました。

※この活動は南橋団地の住民を対象としたアーツ前橋の「表現の森」の一環として行われた継続事業です。

プログラム概要

期間	3学期(2020年1月~2月)
場所	前橋市立桃川小学校 視聴覚室、4年生各教室、5年生各教室
対象	前橋市立桃川小学校 4年生3クラス、5年生3クラス、6年生3クラス

アーティスト

なか しま ゆう た
中島 佑太

前橋市立
桃川小学校



3年間通っている桃川小の子どもたちは今年もアーティストが来るのを楽しみにしてくれた。

当日までの全体スケジュール

日程	内容
2019年2月25日	校長先生、教頭先生、2018年のAISに関わった先生たちと次年度のプログラムについて話し合い
8月21日	校長先生、担任の先生へ授業提案
12月24日	校長先生、担任の先生と活動日程、時間割、内容の意見交換
2020年1月~2月	5年生：一版多色画の授業へ補助教員として参加
1月23日	6年生：「絵画《足尾風景》を巡って」ワークショップ(1・2校時：6年1組、3・4校時：6年2組、5・6校時：6年3組)
2月25日	4年1組：「絵画《足尾風景》を巡って」ワークショップ
2月26日	4年2組：「絵画《足尾風景》を巡って」ワークショップ
2月27日	4年3組：「絵画《足尾風景》を巡って」ワークショップ ※臨時休校により中止

(アーティストプロフィール) ----- 中島 佑太

1985年群馬県前橋市生まれ。幼少期を南橋団地で過ごし、ワークショップを手法に活動するアーティスト。2016年から南橋団地でアーツ前橋と「表現の森」の活動を始める。南橋子ども育成会などと連携し子ども向けのワークショップや団地の住民を対象としたツアーを定期的に企画している。2017年からは、南橋団地を校区に含む桃川小学校の図工授業に長期的に関わっている。



図工なのに算数のような問題を使って頭の柔軟体操。先生も一緒に。



近藤嘉男《足尾風景》の複製画を鑑賞しながら、みんなで意見交換。



二人一組でグループになり、相手の賛成できないことを聴きだし、線で表現します。



今回の《足尾風景》は南橋団地の子どもたちと行ったワークショップがもとになりプログラムが作られました。きっかけになったワークショップの映像を鑑賞。

表現の森について

2016年度から「表現の森」のプロジェクトとして、南橋団地の住民を対象としたプログラムを中島佑太と開始しました。2017年度からは南橋団地を校区とする桃川小学校へ中島氏を派遣するプログラムと連動させることで、学校と地域を行き来するような活動に発展しています。これまでの活動は、以下の特設サイトからご覧ください。中島氏によるアーティスト・イン・スクールのレポートも掲載しています。

URL ▶ <https://www.artsmaebashi.jp/FoE/projects/project03/>



今回の《足尾風景》ワークショップを一緒に考えた南橋団地のメンバー



QRコード

活動のポイント

作品/表現を通じて複数の教科に関わる内容を学ぶ
図工という特定の技術を学ぶ教科と認識されやすいですが、作品を制作する動機や目的を改めて児童と共に考えることで、社会や国語のような異なる授業の内容にも出会うことができます。

相手の話を聴くことから生まれる表現を楽しむ
表現することに苦手意識を持っている児童の中には自分には創造する力や描写する力がなくて感じている児童も多いはずですが、自分の身近な人の話をよく聴くことから表現することの意味が生まれることを体験してもらいます。

学校のうちとそとで子どもたちとの関係性を構築
アーティストは学校のうちとそとの児童との関係性をプログラムに反映します。親でも先生でもない大人と学校のうちとそとで出会うことで、子どもたちとの信頼関係を築いています。今回のワークショップ形式の授業も、南橋団地の子どもたちとのプログラムがきっかけになって生まれました。子どもの発言や発想を拾いあげながら、プログラムを作ります。

子どもたちの声

- 「授業」という枠じゃない気がした。しぼられていない感じ。みんなが自然体になれる気がした。賛同できないものをメモする授業で、みんなそれぞれ賛同できないものがあって、そんなことが賛同できないのかと自分とは異なる考えを知れたのが新鮮で、自分では思いつかない考えを知ることでもできた。(6年生)
- 人それぞれ考えがちがうということ、改めて知ることができたので、とても楽しい授業でした。また、学校の授業よりも自由に想像が出来るので、このような授業が増えてほしいです。(6年生)
- いつもとは、ちがう図工の授業で楽しかったです。また、友達の色々なところを知ることができてよかったです。学校の先生とちがったので緊張しましたが、これからも、アーティスト・イン・スクールを続けてほしいです。(4年生)

先生たちの声 <4年 木暮富士男先生>

「アーティスト・イン・スクールって何だろう？」子どもたちは普段と違う図工の授業を楽しみにしていました。前半の話やビデオを通して「いろいろなやり方がある」「正解はひとつではない」ということが印象深かったようで、その後子どもたちはよく口にしていました。後半の実地学習でもペアの友達の話をよく聞き、思ったことを楽しそうに、自由に表現していました。画用紙からペンを離さずに描き続けるなど新鮮な活動が多く、今後の創作活動に活かしていければと思っています。

----- (アーティストからのコメント) -----

人が集まるということは、それぞれ違う考え方が集まるということで、人数が多ければ多いほど、宗教や民族、いろいろな家庭背景が増えるほど、まとまっていくのはとても大変になる。学校はそんな多様な場所である。それぞれの考え方に耳をかたむけ、時には反対の意見もぶつけ合い、お互いの違いを知る。「違い」は人間らしいということ、だから私たちが表現しながら生きていくのだ。

先生方へ
For School teacher

アーティスト・イン・スクール実施の流れ

1

派遣アーティスト決定

展覧会に参加するアーティストなどから、アーツ前橋が派遣アーティストを検討します。
実施希望を頂いた学校や、前橋市教育委員会と相談のうえ決定した学校に対し、実施時期や内容を踏まえて派遣アーティストを決定します。



2

打ち合わせ・下見

コーディネーター、アーティスト、アーツ前橋スタッフが学校を訪問し、児童・生徒の皆さんのふだんの様子や先生のご希望をお聞きし、プログラムの詳細を打ち合わせします。また、会場となる場所の下見を行います。児童・生徒の皆さんの肖像権についても、予め確認させていただきます。



3

アーティスト・イン・スクールの実施

スタッフやコーディネーター、教育を学ぶ大学生などがサポートで入ります。今後の事業に反映するため、事業終了後に児童・生徒の皆さんや先生方へアンケートの実施をお願いする場合があります。



4

報告書・記録写真・映像の確認

年度末までに報告書や記録映像などを作成します。学校へ内容を確認させていただいた上で、アーツ前橋の公式サイトで公開します。

*原則として、前橋市内に所在している学校で実施します。/*学校側の費用負担はありませんが、学校にある機材や道具をお借りすることがあります

これまでに実施してきたプログラムについての詳細はアーツ前橋公式サイトに掲載しています。ぜひご覧ください。



QRコード

主催：アートによる対話を考える実行委員会・アーツ前橋
助成：平成31年度文化庁地域の博物館を中核とした
クラスター形成事業
コーディネーター：小田久美子、梶原千恵

アーツ前橋
ARTS MAEBASHI

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16
TEL.027-230-1144 FAX.027-232-2016
MAIL. artsmaebashi@city.maebashi.gunma.jp
<http://artsmaebashi.jp/>

 文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan